

秋風庵文集 乾

2
81
71

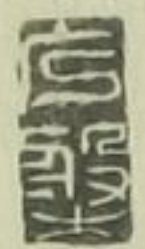
中村俊定文庫
文庫 18
839
1



郎溪居士
遺文



引



余不解諧歌、秋風翁之有妙
指於此、聞之先人之言矣、昔
翁截紙製烟具、刻一首、以貽先
人、每酒間與至、吟誦以嗟嘆之、
去今二十餘年矣、丁亥先忌、從

祭餒于門下生既畢而內集及日
之久廣吉甫至夕南豐致其家
先生之書既罷而入書之房披緘
燈下讀曰先伯父遺稿在家頃
去家君及門人謀將餒之特
皆因余請先生之有一言再三

辭不可敢以告余讀之三復法
然泣下曰嗚矣廉卿白首戴髦
我此其孝思何乎宿齋以來悽
愴有不能身已矣不意明發不
寐之夜而又聞翁之遺稿者此
舉矣追懷舊日憑几瞑坐窓前

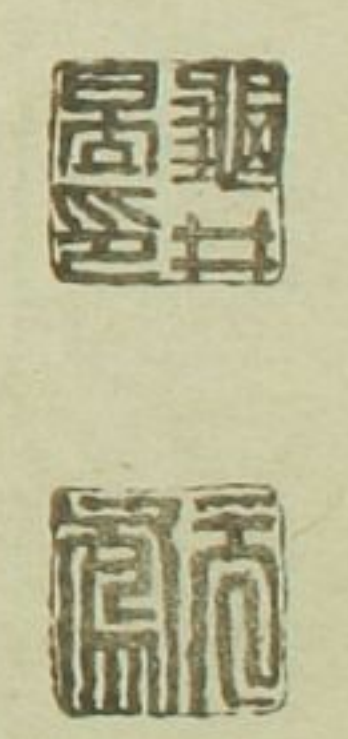
松竹猶學其吟誦之聲，若有
人兮，予我簾櫳，恍兮惚兮，若影
無容，不曰聽於無聲乎，況空谷
之有壑乎，遺愛以存，感念以促，
遂把筆而洩情於文字，余之
不解諧歌，廉卿必知，知而命之。

豈非以先人如邪，先人博達，凡
月餘情，國雅聯誼，亦衝口而出，又
為翁嗟嘆，必當非虛觀乎，亦
余則當是夜而見昔先人於廉
卿書上，若有受教者然，加題。

文政十年上巳前夕



北筑 昭陽龜井呈撰



幹いど肉を畫と骨と連うすは
杜子義うゑし壺のそ志う何ふはあら次
か廻し乃事業まららにわしき
と以て礎とい那し如うとや月化翁
乃幾向を骨氣雄高実く音子
能流亜や河斗も紀乃若りし世を
淡くの姿を好む物し夕いと聞はる

今とはや其人の心あり如魚に詠
文の心を起すを以て一乃其の成
たや其の心を起す世の人を以て
讀むるを以て其の心を起す
今とはや其人の心あり如魚に詠
文の心を起すを以て一乃其の成
たや其の心を起す世の人を以て
讀むるを以て其の心を起す

書を以て其の心を起す
乃其の心を起す世の人を以て
讀むるを以て其の心を起す
今とはや其人の心あり如魚に詠
文の心を起すを以て一乃其の成
たや其の心を起す世の人を以て
讀むるを以て其の心を起す
今とはや其人の心あり如魚に詠
文の心を起すを以て一乃其の成
たや其の心を起す世の人を以て
讀むるを以て其の心を起す

いまは世人の得るものあるべきに
知る人若少き、満ちたれば
後世に子雲の如く、必是を好む
向ふ心會れ、事なきは、
其子雲一人なり、賜城羅士序

古泉の道人書

昔は秋風庵に住む人、其日
田代多し地を去らば、復て之に
秋風の静なり、我れ楽しむ、世に
其の破も、やがてを、あすや
いそし、祖翁乃、あまは、わたり
既、此、な、く、此、大、江、丸、館、島、の

清みして殊く文章ありと云ふるは
十の良はうらのむじり一を海よりて
そのまじりあふくみくまをせり
歌さむや二を拙秋三を撰りら
る此より戦ちわりくくん光陰立
や行く既く撰り子世をはりくた

拙子まきりて孝道哉道さる
あやを難わきりるを八子坊乃
ある一そく荷換して一集哉
歌く及ておれきも序者の一人
かえらるゆや文法なく我土
徳をこるあるりあふり善く他の

風人の懐中にて書簡のちなみに
ひそかに法みに残るるやうに
流るれ

保五尾初秋 著人 卍

凡例

一 遺稿と様の事いさる壬午の春に足病
ありあり一時玉来より其の事をり出で許容
を受てり因て羽を疾末の歳より玉来
及び弗水とまは稿を拾ひ集めて玉来と跋を
書けられしも考訂の事と調ひてり弗水
已に致せり丁亥の年より考訂略定し
因て龜井帆之の先生の序を求め又児
子建よりあて跋を依りてむねも世政

伝々々々終々心々任々々々推移々々々々今々
壬辰のまを玉来も又致せりあよ此度急よ
其事々々取計々々々々

一此度上梓のりり児子扶木保長材極外孫
三彦國々力よふれり四子も自ら其まを記々
々れりも序跋多々々々觀る人の煩々々々を憲
々々々々安付ぬ々々々々々々々々

一浪華一肖子よ記々々々此々々々萬の事々々皆々々
肖子跋ありあよ此に詳々々々

一遺稿ハ文二巻並句一巻々々函替々一卷あり此

々々々々先文而々々々上梓々々々々
並句書畫昔々々他日を待々々々のたなり

天保壬辰孟夏

故秋風堂二世

長子長子桃秋傳

目録

卷之上

- 一 秋風庵記
- 一 瓜はくわ
- 一 淡路島の辭
- 一 翁雨井記
- 一 端居三咳

- 一 盆山記
- 一 瞽者小示す辞
- 一 硯匣記
- 一 古人伊勢紀行序
- 一 安譽浄之行状并終焉記
- 一 勸修學子文
- 一 石火集
- 一 芭蕉翁の本像を浪々する事
- 一 知命乃云葉
- 一 芭蕉翁略傳

- 一 古筆帖題辭
- 一 大いらい一枚起清文
- 一 笥を盗れし辭

卷之下

- 一 芭蕉翁の像畫書賞
- 一 上田二段
- 一 筑紫題林集序

- 一 賣桐辞
- 一 伊豫日記序
- 一 浪華を思ふる小消息
- 一 木綿山つと
- 一 筑紫琴はる景跋
- 一 梅のの本像を浪華よむ返るる歌
- 一 花乃山踏
- 一 隈川年魚辞
- 一 休俳帖
- 一 いさわの肉を謝す

- 一 明府君よりこれ御賜きて賀遣を設く
席上の言言葉
- 一 諸集より著せる予々句よ得あるを
返す説
- 一 七つ目牛の焚貝
- 一 かこつちり
- 一 富士禅定
- 一 團扇世談
- 一 い月十五夜月蝕
- 一 俳徳頌

- 一 九州題林集序
- 一 溪法師の豊東の行を送る詞
- 一 駝岳興句集叙
- 一 石亭記

目録畢

槐風菴文集卷之上

槐風菴月化著

秋風庵記

天明乃をいめ此日田の郡塚田といふ所は
閑寂の地を占むる十二畝をいふるに
雅宮のいふは菴をいふく西南乃方と庭
を昔きこれは深山木もついで植る其
中いふも櫻乃むの葉うくれゆり新さし出
せるとる人めもさるをさし母屋跡の耐等

つらゆき清げく又十め思ふとらりの樓まよ
有てひんうしを望めり長蒲君の待必と歸
しよひくむもしうたしに其人をりよをねと
そ月いらも詠めく袖ぬすらし一四面り
堀うけわし一名よおる越後竹うちまて
愛渡き陶瓦の代とす玉元より葉もを
削も出さねと便のちよよとくしむよの因し
心よろうあしむいよと四十にの満よとて
かるもの好も企ぬる六年よはけれくても
世人乃評せむと思けしとあしむいよ

せむたのれ虚弱なるに二四候とくしむか
加りしれをふれ事とく計らん八壽を
損よしとくすしもくし生あるものに死あ
たし一其期乃来らむいせんさよあ
さめるに思慮もく齡を踏ん八道よとりて
もゆるるに家とれむと父母乃御をしよ
世の塵うち拂ひ吾事早禱安歩晩念の
四味とかや習ひを此しとみよ及し恒
の産をまらつねのしとあるに志をた
より借歌をよ好むれをこれむつねの

くくく人々成して樂に興せしめり
獨々たの志を却しつゝや國こゝろよも
乃文をえりて親めるる多かる中よも雪中
之庵の二世なる宮を啓居たりありあり
口をいれなほくもとあるにすまじしむあし
らくる芭蕉のおね乃自画賛一軸をこゝろよ
ふめくいおこりも急はうーこせて秋風
と呼ぶはしと庵の記後よく添て贈る
それのくくお乃肖像一軀須中めし
練よよを置しよるしけと寸らめたるを

親弟杉風のてらうり刺める物くく是も居た
らめくくつ又後河路や島田の驛れる
塚本如舟めくくおと交を浅くくはのめ
お歴乃おくく人を訪れくのち宗長庵よ
杖を留くく京を慰れくくお彼茶橋も茶乃
まといとれ口すまじくこのはの事なりん
其をすまじくく愛敬の茶碗ありく塚本の
むくくれる桃舟れ家よひめ置ると東武乃
杉浦蘆角老人くくれよ舊友の回ありて
譲り受つると老人くく又予に風流の縁ありて

送り〜賜るぬ〜いなき製を
いふも庶慥なりこれよつけての翁平生乃
清素の程ゆもいやらぬ是等れ袖は道
を執す教人の〜り〜あ〜あ〜得〜
よ〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜
かく集れる是や倅いこのほれ〜い〜い〜
い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜
勢せ〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜
の素意あり忘るに少人の閑居覚えぬも
あ〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜

不善〜い〜い〜い〜い〜い〜
も守るは信を也心も折らぬ此外より願いも
あ〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜
死ん〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜

あ〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜

何つ〜い

みの〜園本菓乃那真桑む〜い〜い〜
甜瓜味い他〜い〜い〜い〜い〜

芳一それいふやたしきおとけりいしての
瓜の事に通せり暮夕顔の時とありか
たる糸瓜南瓜乃むらげよをひきられる
よのれ菴も古めりい今午坊の方より地を
借こく十歩餘りにりの瓜作らめと老圃
よ同つて二月中旬段の種をねろり除生の
きふ水灌ぎ卯月の旦より芽を摘むと
山ほとよほ志をなくけりめころ乃色
せる花の咲出りうねりまきく宮にれめ
よたつびやうやに華もやちよ「あゝ」詰一語

ものほうみそまのまの指のかいさうり
々々を兎の形も画くかくてあらそ月の
日もうちふおひく瓜の時ふちりぬ大和や
御堂殿も奉れるものよこそ奇しきむじ
後りい開つれりいさささそれみきと
好める人こも臨りつ又滑稽の徒に某り
く悲し腹をいさ人よ任する事小豆の
瓜をきよこ地瓜のこころさういひり
しそを後ここのりいされよ朝と亂れ
しる世乃解きしりよりあむらうこ乃

治化よ馴らるる民の身よ南も及そよ
凡ハ爵を怠めらるる婦人乃あまの粧ひ
して通る南爵のうほりよ道すれ瓜
巻く死らるるこの書よ志るせり我國のま
奢を去る約よ従ふのやせよとやせり
誰も綺羅を飾らす香氣の觸たるねえ
瓜一葉もろことなをのつら一みの恩深
くそのものよ及らるるれその此乃
ある一ハ東陵の賢者の慕らす孫鍾の福も
心ゆく身と軽くしり南宮のむら

膝う抱く涼風の来るを樂しむ

蠶よそ外り求めらるり皮

淡波女乃辞

あるふみよ南帝國よ淡波姑といふ女あり
疾疢を憂ひて手を種し一草を服して
瘵る事を得しり故らうの事を淡波姑と
稱くしり又此をいひて説あま人を
救ひ一切をもく反魂煙といひて

たゞとてゑるふ十数字あり法書よあり
煩しとれにまにこころす何れ乃何人方とや
是と讀しと筆のすむ浦ありとや
とすしとていさむと本草よ烟叶とあれと
たむいさむと雜事ありとていさむ
相思とていさむこの二名言く通用せり
とてに碎醒徳饑のとも功ありと解せし
と鶴林玉露及ひ五雜組よ檳榔の四徳と
述しとれと相おれこの物乃純毒つとら
り烟酒録よ茗とれとていさむと藥とま

*

予あつねて目前日用のうとていさむと品題
乃とていさむとていさむとていさむと
佛席よ列とていさむと難題と探るるといさむ
あつとていさむ果とていさむと秀逸のうとていさむ
淡芭菘とていさむと移り出ると又ハ碁將碁局上の
総敗とていさむと時とていさむと不亂烟とていさむ
火とていさむと小首とていさむと傾けとていさむと
とていさむとていさむとていさむとていさむと
とていさむとていさむとていさむとていさむと
とていさむとていさむとていさむとていさむと
とていさむとていさむとていさむとていさむと

を扱ひ或ハ不平の中を説きとしくさみに
願をさうしめうらわしけあるひハ媒口より
志むくさうりた輪をまきこすのちを揮き
赤繩結するもなびたるあつこひたせむ
の末よこそ颯々の聲をも樂しむたれ
是等の數事皆此もの力をさうりさうの
佐使さうりれるこそおほめ事持れのと
うさびさうり居るも友ある心地さうりも
忘れさうり思ひ出物さうりある時
もさうりさうりの一癖の退屈をたかえす

旅路り火籠の因こ一樹の陰乃餘燻は愛
相さうりこ徳孤あるすといさよ一たのま
皆さうりかくふの明乃高唐のさうりさうり
南夷さうり来りさうり崇禎のさうりて専ら
税さうり本朝の慶長年中程を西洋より
得さうりさうりいひ傳り寛永のさうり月よ
日に流行さうり酒代へ茶に代へる貴を
たさうり賤とれくさうりよ此さうりたかくてハ
と思さうりさうりさうりか

是をたむひ會釋石とつゆ白よい碎き
くこれをしつたけ成汰す此砂して
河湖江海遠山幽谷雪月風雨の景迹
をこむも方乃波ハ寒も秋ハ冷しく夏ハ徐
よ冬ハ烈しく浪も四つの差別ありとら
和歌二見此浦波たまハ殊更なれハえむ
人もこころに心留つ魚——又まゝふもまゝ
瀧をこぼす山ありつらふも——ん小那山
のとす——むもおもひおさるこれよ無
雜乃詩と謂——其外達つとよみこの節

移徙首途尋よハ祝我の益あり又吉社
家宅人物をたかつ木たかハ彩れるめて
あやあす星を函とと編くころも山ハ空
なゆらぐ万物をうむと宣ももう肌僅三寸
乃匙を弄くくかろくことと挿し出さむ
とはは枝二派ありて予り見ハ清原流
とちうれを豊ふひ——人の招よにやうれを
これをも念とせしれ——物衣の換つともおす
されい——の幾年も念慰も——う——た
祝——さうすもあも——れ——ハ——あらるる

しゝ其見入る事の味いと云ひし然るに我
り能くわくる何と目とこのものや種心よ
貯へけと時とて心すまひ出つ物
りりとも無う一友たうて自に慰む晝
夜の別もなく老くいまはくかふと好む
事ものよととみ言下よ伏し
表徳を乞つり白居易の琵琶行の語より
拾へあふ川琵琶よ流る啄木に
羽衣飛燕の曲ありと能く秘るりあり
正路を求めく到らるるふりし

詩曲年明と叫り必應せ

硯匣記

江都より梅公羽宗因七世乃孫ある統と
従ふ田東庵花影筑紫路よ杖と
けらう菴の糧を減らせるもるりえり
或日文題を採り無せし事ありし
須陀の師より旅の硯を贈る相あり

出〜〜一〇句をほ〜〜とて
寸あより横二寸に〜〜何の木れをて
とよ〜〜す〜〜の契〜〜の母日
を〜〜む〜〜見〜〜蓋よ美人と
御は〜〜と〜〜名ハ清〜〜
〜〜一〇字胡蘭氏と〜〜彫り
今ハ〜〜画圖の中ハ似〜〜す〜〜む
白氏ハ毛延壽と引〜〜や〜〜
〜〜判〜〜正人の昭君〜〜金と得て
か〜〜法の巧を畫せ〜〜疑る介有

永叔と〜〜又人ハ明妃の如あり〜
実方兩師の外ハ和諳乃題ハ風流
又〜〜ハ他物好ハ法〜
〜〜即〜〜ハ一章と法〜

母の顔都ハ雲の〜〜

古人伊勢紀行序

某ハお臣の侍ハ舞貞閑器あり〜
南ハ千〜川乃ほ〜ハ人〜

阿爺の成音を聞ゆるは正徳四年甲午乃
しられよとてよの足なき下よ亦もたしおの
ころの辨しとらしめせりはより叔父ある人の許
よとて財を運し貨を販すてとて事よ
別もとてたもとてや家よ歸里とて其業よあら
くころり難波はへ船乃は某よ高貴れ切を
積とてとて凡二十とて後とてりとてあじ勉え
きとてくちとてりとてわし身はとてりとてり
りとてとてとてとてとてとてとてとてとて
ふとて依りとてとてとてとてとてとてとてとて

孫よひまこと枝葉よとてわとて彼女とて同よ
ころに表し指す事とてりとてりとてりとてり
も里い出せりとてりとてりとてりとてり
市中遊とてりとてり池魚乃とてりとてり
居やとてりとてりよふけとてりとてり
ころはとてりとてり別室にとてりとてり
たとてり身願よとてりとてりとてり
えとてりよとてりたつりとてりおちり
よの質殖の事とてりとてりとてり
よお様とてりとてり日夕れ樂とてり

如月のうれうれの白き生誕乃日たうり古稀の
後賀の時よおれ一ふ八十の祝事催しあんと
聞ゆるに顔うらやういふいふさしてゆか
かといよ一十年あれきたまひそのと一世の
告の聞くるをいふいふいふいふいふいふ
事きたるにたふたふたふたふたふたふたふた
さうやういふいふいふいふいふいふいふ
一六十一年前の母乃槐のゆきうの熟せり
東へ秋も必し大方の年有る一それよ
の命あゝとて報はらるる笑ひよいふいふいふ

今も目のあゝいふいふいふいふいふいふ
何事も背へいふいふいふいふいふいふ
いふいふいふいふいふいふいふいふ
壽益を催すまゝ

まわりのあゝいふいふいふいふいふ

老子道君れ故事をあかちて祝はるせ
一よいふいふいふいふいふいふいふ
卯月と昔春とまらもせぬ較乃初るをいふ
いふいふいふいふいふいふいふいふ
いふいふいふいふいふいふいふいふ
いふいふいふいふいふいふいふいふ

たつらむと雖もつひ御ねらうへの差方れるま
へ一筆夕のまふり桃秋もつちり見まぬ
ま由の終つり同くそまようん一まのまふち
又風友のまを傍か母よりれみく俳席を
塞けり来まへの妨げすなやと母なる人よ
使し終つらう昔人の律義つとむじこま
歸らそ布乃ほこらあまは是寺の事一も
とつらく終つらまそあまひあまの急ま角
よ其まいこまぬけこのもつちやま志ひて
止あまのせす水無月乃十四日祇園會と

らままの信つらまの家も務まらつせぬ同
まサ日去つらゆれり報ひれし譯せ
たやと月代刺しを刷ひつらあつら訪ひ
あまよつらぬ是うはせまつ杖たひま
あまふたつらまの其の夜つらつらよ
増つらつらつら下痢のつらつらつら
のつらつらつら腫氣を伴せつらつらつら
まのつらつらつらつらつらつらつらつら乃
くつらつらつらつらつらつらつらつらつら
まのつらつらつらつらつらつらつらつらつら

あそしく十念授け賜ふなら目されころ
かきわぬいぬいめしと回言ふらめれすけ達
枕よを放れす鑑うらみし念佛乃整平
とくま〜しる者の月々新のめら〜にけれ
くも后辨らあたら〜とめら〜は〜法
よめしちち

〜しる者の月々新のめら〜にけれ

地下乃〜しる者の月々新のめら〜にけれ
の御前よ〜しる者の月々新のめら〜にけれ
か〜しる者の月々新のめら〜にけれ

あそしく十念授け賜ふなら目されころ
かきわぬいぬいめしと回言ふらめれすけ達
枕よを放れす鑑うらみし念佛乃整平
とくま〜しる者の月々新のめら〜にけれ
くも后辨らあたら〜とめら〜は〜法
よめしちち

あそしく十念授け賜ふなら目されころ
かきわぬいぬいめしと回言ふらめれすけ達
枕よを放れす鑑うらみし念佛乃整平
とくま〜しる者の月々新のめら〜にけれ
くも后辨らあたら〜とめら〜は〜法
よめしちち

こころのちかやうに

目のまはちかやうに

石碑のまはちかやうに
おのちかやうに
唱へし清く
い書おろせし
と子孫への
方の追慕
ふち路り
らふれり

と書つる
世を辭
おのちか
うちか
今ら
よみ
空見

勸修學子文

かゝるわけにあらざらぬ身は
その業ありては好む程に
一部にあらざる部は
彼の類にあらざる
一必ずしも益あり或人後十輪院内府公よ
歌にむよりの書に待てん
あつせしに大學をえり
り存すしに
の書とて歌に便したる
はらにえたりとあらば
二五

しりては
外ありては
わつた
のい
ゆ
出せる
ま
文化の自由
あ

かきい一人の悲しきよの記
傳一聞えに埋りしうらな道よれ歎き
の傍ちひひにぬれし西の國やわが古郷よ
ゆよゆせむいなきけに女妻のあはれ
ししにちちすかたのものを介抱して這
こぬもしつぬぬ五の里れ家つしう只白骨
のしそのされるちかかて泣くまゆ悼
のうあゆいふよ集めし無霊魂を慰めよ
に中乃ちあひし集めて物くこしに
酸鼻しちししみのよ綴りし求むよ

看す石火光中言此身とう唐人乃詩を思ひ
出せるよ一帖の表よ顔してのくちむ

陸奥や限をぬく人も秋也

色紙の本文を後集にうつし終

こら位めしむかへを西北十丁とゆうゆよゆゆ
後り村らに野紅まん女乃夫婦あひあ
せよ能事しゆゆ蕉の徒たなり五老井り
まをせる文選中の雙白堂に記し此ららるる

よ作れるなりけりねえ古の物とてその其時代
名つくる人々乃筆記せる物あり又外よ
木々刻める色紙馬の坐像一尺をうりたる
をも藏せり柳子庵に雕せりひびくあり
光船の子坊駝岳の結し杖を留めけり
一も像をえりめりるを忘るるやうに人
して乞ひ感る文々々あり今れ家長を
むすこよありめは書を好む風流のあり
味くありけりげは朱の物とてけりけり放
しけりお谷川のそとたけりめありけり

月日は半れりるはしく時ありやとてあり
とありけりるはしくあり人乃恨むやない
たむねとありけりるはしくありけり
急角にありけりるはしくありけり
こありの尾よりけりるはしくありけり
ねえとありけりるはしくありけり
ありけり幸ひ此秋彼地を趣くこり
とありけりるはしくありけり
よ後この科たけりるはしくありけり
孫めける事三十日帰ありけりけり

の物好^{ものよし}の^{まじり}布^の調^{ていど}度^どめ^めの^{もの}備^び
社中會合百約興行ある^{こと}け^け
善書畫^{ぜんしゆゑ}一^{いつ}頭^{かぶ}おせり^{おせり}の^{もの}真^{まこと}實^{まこと}
^{こと}俳^{はい}道^{どう}の^{もの}學^{がく}
何^{なに}の^{もの}心^{こころ}あ^あら^らじ^じく^くの^{もの}心^{こころ}
風^{かぜ}肝^{かん}雅^{みやび}心^{こころ}此^{こゝ}の^{もの}情^{なさけ}

儂^{のほろ}と^とす^す枯^か木^ぼの^{もの}心^{こころ}を^を學^{まな}び^びせ^せ

知命の^{ちめいの}言^{ごん}葉^{えふ}

てんめい^{てんめい}の^{もの}言^{ごん}葉^{えふ}
性^{せい}を^をお^おす^すの^{もの}事^{こと}は^は伯^{はく}玉^{ぎよ}乃^の四^し十^{じゅう}九^く年^{ねん}の^{もの}非^ひと^とを^をる^る
か^かの^{もの}あ^あら^らじ^じく^くの^{もの}心^{こころ}を^を學^{まな}び^びせ^せ
も^も既^{すで}に^にの^{もの}事^{こと}其^{その}年^{ねん}に^にあ^あら^らじ^じく^くの^{もの}心^{こころ}を^を學^{まな}び^びせ^せ
賢^{けん}よ^よの^{もの}心^{こころ}を^を學^{まな}び^びせ^せ
屬^{ぞく}も^もあ^あら^らじ^じく^くの^{もの}心^{こころ}を^を學^{まな}び^びせ^せ
富^{とみ}た^たむ^むの^{もの}心^{こころ}を^を學^{まな}び^びせ^せ
こ^この^{もの}心^{こころ}を^を學^{まな}び^びせ^せ
寺^{てら}の^{もの}心^{こころ}を^を學^{まな}び^びせ^せ
こ^この^{もの}心^{こころ}を^を學^{まな}び^びせ^せ

の友とちせらるゝ勸めしつゝの事と可方の
相忘れる人よ告やゆめむしつゝの事と可
五十ふ集よとて半の事と可むしつゝの事
しつゝの事と可むしつゝの事と可むしつゝ
すきもの頌文車と可むしつゝの事と可
お殿鼓の皮も可むしつゝの事と可むしつゝ
をむしつゝの事と可むしつゝの事と可
れあむしつゝの事と可むしつゝの事と可

ふしつゝの家よ杖の年玉世の事と可

寛政八年丙辰春

芭蕉公翁略傳

芭蕉公翁の本土ハ伊賀乃産よして松尾氏なり
正保元甲申ハ歳出生俗稱あふし記せれと
忠左衛門を是とすし諱ハ宗房とて家系
彌平兵衛宗清より出たりと一説ありし事
證據ありし事なり其直偽ハ心あり
とて上野藤堂家よ近仕せし事あり

辞し々季吟法印乃門あかひく諧歌よ遊
里これらひてしり師たのめをたつり桃青と
とをくして數號にり法書よ顯しつれそ爰に
贅せず其中よくそせ紙菴もく行る其比
や世争て興せし檀林流よもおれし道
乃木撞の作よ看破しつり三十七の歳深川
の芭蕉芥子よ又く薙髪ありしをしり延寶
天和の異舳忽々慶もく門生數千人中無の
祖正風の翁と稱すしるに東西南北乃志
ありし生涯旅泊の風流を案し畿内の

春日を檜笠よ戴き越路の月雪よ居き衣の
袖らち拂ひし葉の杖突減らし奥羽乃夏
草に起臥ありしも終る難波の旅よ病て
八日の夜甚多ハ枯野をく末期乃一句をふり
元禄七年甲戌十月十二日五十一よ南市堂
前南久太郎町花屋仁左衛門しつれ家り
とく世を辭しつり柩を回める人よあま
陪従しつ淡海なる東津よ送めし蔵む
つしつる宿る音齋の終焉乃記しりか
りししり衣鉢を傳れ流る事あつと好む

調ひく後筆を導き物々蕙の道にまよ
くくハ字九字もいふれつて一いつて脱よ
百廿餘年の今もいふ其の派の流きといえ
せり傳へ来つるハお承の人乃ていづて悟入とい
せと共よたつてつりつて同一高根の月を
見るも書まへり何り此畫像の像よおの
事蹟ありよとを説きくも常に湯竹の
情をいふもいふとていふよう老筆を執
るも信をいふとていふ感應ありく佳境
よよいふとていふ真如ありとていふハ

古筆帖題名

古筆帖名家のみづから筆をいふとていふ古筆
十筆をいふとていふ一帖とあり龜山下乃五珠堂
よとていふ文明よりいふとていふ寛政と改るよとていふ二十
九元のもよも燧人氏の手を通す星のやとてい
ふ二百二十餘年のとていふもいふ衣魚乃腮よとてい
ふとていふとていふ教養ありとていふとていふ仁里好ハ

吟案の外も別の子細も候りす但一六義篇
序にまじり事代行ハ皆決定し〜娵情景
曲二郎の〜句化来る〜とあま〜ら〜は〜
候あり此外より奥深よ〜をなせ〜二神
の憐〜も〜つれ感應よ〜を〜倣へ〜仰請を
信せん人〜〜ひ和漢其書を能く學ぶも
俗談平話の野人乃身よた〜と書二才の
初心の軍車よたれ〜と〜切者の〜よひを
せす〜〜只一面よりは〜〜

蜀を次四行一辭

い〜を〜かり雪れ下たる升のふ乃親おま人
の〜は〜ち〜む〜と〜書〜〜孟宗竹
と〜し〜る〜を〜み〜らん此あ〜りあ〜ら日向乃國
よりりま〜し〜るを根〜〜〜の軒端
よ〜も〜植〜し〜る雪れ〜〜〜乃は〜り〜も
を〜か〜う〜の〜を〜し〜る〜〜に林をた〜せり
此〜も〜ハ結〜〜〜〜〜角〜〜〜其數

あはれあるもの孝ある人の子とこそはれぬ
も書きしれすやさしきも楚人弓を拾ひて
ひきしにも射へしとて法の業すとてかく
さうり嗔恚を止むる作善乃益ある一よ
事ありし今も臍を噛めしれ餘り懺悔
のこもよおそむをばふらわれ我奉る諷誦
ともみらうならせらしと佛の前より又も



